

エペソ人への手紙1章1-14節 「三位一体の神からの祝福」

1A キリスト・イエスにある挨拶 1-2

2A 御父のご計画 3-6

1B 天上にある霊的祝福 3

2B 聖なる者 4

3B 神の子 5

4B 恵みの栄光 6

3A キリストによる実行 7-12

1B 血による贖い 7

2B みこころの奥義 8-10

3B 御国の相続 11

4B 望みの栄光 12

4A 聖霊による保証 13-14

本文

エペソ人への手紙1章を開いてください。私たちはこれまで、パウロの手紙を読んできました。ローマ人への手紙、二つのコリント人への手紙、そしてガラテヤ人への手紙です。それらは、いかにして人々は神によって義と認められるのか？という、救いについての教えが前面に出ていました。ロマ書は、信仰によって義と認められることが体系的に教えられていました。二つのコリント書は、その恵みによる福音の自由が、何をやっても許されるという誤ったことを正すために書かれています。そしてガラテヤ書は、信仰だけでなく、律法の行いが救いに必要であるという、偽りの救いの教えに警鐘を鳴らしています。

次の、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、そしてコロサイ人への手紙では、何を教えているのでしょうか？それは、「キリストの教会」です。教会とは何か？が、エペソ書において体系的に教えられています。キリストのからだであるということです。そして、ピリピ書では、その一つになった教会に、亀裂が走っているということで、その誤りを正しています。からだに亀裂が走っては、からだとして機能しません。そして、コロサイ書は、キリストの教会の根本を覆す、偽りの教えに警鐘を鳴らしています。かしらであるキリストにつながっていない問題です。からだの各部分がかしらにつながっていなかったら、元も子もありませんね。

私たちは、こうしたキリストの教会の教えの部分、教会とは何かについて、じっくりと見ていくことができます。エペソ書 1 章の終わりを見ると、「1:23 教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです。」と、まとめられています。今日は、1

章の前半部分、1 節から 14 節までを見ていきたいと思います。

1A キリスト・イエスにある挨拶 1-2

¹ 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。² 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

パウロから、エペソにいる信者たちに宛てた手紙です。エペソへの宣教を使徒の働きから思い出してみましょう。エペソでの福音の種蒔きは、アポロによって行われました。しかし、アポロは、バプテスマのヨハネまでしか教えていませんでした。先に、コリントで、パウロはローマから来ていたユダヤ人夫婦、アキラとプリスキラと会っていました。その夫婦が、アポロが、この道を宣べ伝えていた時に、エペソにいました。そこで二人は、アポロに、この道についてもっと正確に教えました。それで、さらに力強く、イエスがキリストであることを論証したとあります。

パウロは、第二次宣教旅行で、最後にエルサレムに行く途中でエペソに立ち寄っていたものの、その時はエルサレムへの旅路を急いでいたので、短い滞在でした。けれども、第三次の宣教旅行で、彼は、三年近く、そこに滞在することになりました。初めに、アポロの宣教によって、信じた人々に、聖霊を受けましたか？と尋ねました。聖霊のことは聞いたことがなく、ヨハネのバプテスマのバプテスマしか受けていないと明かしました。それでパウロは、イエスの名によるバプテスマを授けたら、聖霊が臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言したりしました。

そして、彼は初め、ユダヤ教の会堂、シナゴグに入り、神の国を論じましたが、人々が頑ななので、場所を移して、ティラノの講堂で論じたのです。ですから、そこはユダヤ人だけでなく、異邦人も多く集うところで、語りました。そのために、アジア中にみことばが広がったのです。「使徒 19:10 これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。」これが、エペソというのが、宣教の働きでとてつもなく大切な拠点となっていった経緯です。後に、使徒ヨハネも、パトモス島に流刑になって、連れ戻された後、エペソに滞在し、ここで亡くなったと言われていますが、エペソは、当時のアジア、つまりトルコ西部一帯に、またその周辺の地域に、福音が広まっていく拠点となったのです。

パウロによって、大いなる奇跡も起こりました。彼の手ぬぐいや前掛けだけで、病気が去り、また悪霊も追い出されました。そして、ユダヤ人にも魔術が入って来ていました。なんと祭司の息子たちが、祈禱師になっていました。試しに「パウロの宣べ伝えているイエスの名によって、おまえに命じる」と言ったら、悪霊にとりつかれていた者が、「イエスも、パウロも知っているが、お前は誰か？」と言って、彼らを痛めつけたのです。そして、多くの人が恐れを抱き、魔術を行っていた者たちが書物を持ってきて、焼き捨てたのです。このような大いなるわざによって、イエスの御名はさらにはあ

がめられるようになりました。

しかし、そのアルテミス神殿の銀細工人が煽った暴動で、パウロはそこから出て行かなければいけなくなりました。彼がギリシアに行ってから、エルサレムに向かう道で、エペソの長老たちに、最後の別れの挨拶をしました。そこで、神のご計画を余すところなく知らせたこと。それから、教会に、狼が入って来て、実に彼ら、指導者の中からも、曲がったことを語って来る者たちが現れることを話しました。テモテが後に、エペソでの牧者になりますが、彼が、こうした曲がった教えを説く者たちと対峙しなければいけない様子が、彼への二つの手紙に書いてあります。しかし、彼らはそうした偽教師たちに、しっかり対峙したようです。それは、黙示録 2 章に書いてあります。イエス様ご自身が、彼らが耐え忍んだことをほめておられます。ところが、肝心の愛を置き去りにしていました。そのことについて、悔い改めなさいと命じられます。

このように、彼らは、教えの風が吹いていることに耐え、忠実な人たちでした。今、ここに、「**忠実なエペソの聖徒たちへ**」とありますね。いろいろな困難に耐え忍び、イエスの御名をしっかりと守っていたことが分かります。そして、「**聖徒たちへ**」とありますが、聖なる者とされた、世から聖め別たれている、ということです。午前礼拝でお話ししましたように、エペソは、偶像礼拝に満ちた町でした。道徳的にも退廃していました。その中で神のものになった、聖なる者になったということです。

そしてパウロ自身であります、「**神のみこころによるキリスト・イエスの使徒**」と紹介しています。これから読んでいくところは、神がご自分のみこころままに行われる、神の主権が書かれています。すべてのことは、神のみこころによってなります。自分が今、こうしているのも神のみこころで、パウロにとっては、それは、キリスト・イエスによって遣わされた使徒だということです。これは、自分が選び取って決めたことではなく、神が選ばれ、彼を使徒にするよう定めておられました。私たちのキリスト者としての人生、生活も、神のみこころによって、その選びと召しによって定められます。「自分は、神のみこころによって何々である」とするところに、私たちは留まる必要があります。

パウロは、その神の主権を強調するために、イエス・キリストではなく、「**キリスト・イエス**」という順番で話しています。キリストは、もちろん姓ではなく、使命です。油注がれた者という意味で、油注がれるのは、主に王です。祭司も、預言者も油注がれました。神に任命されている、ということです。ですから、キリスト・イエスということによって、神に任命された王なる方、イエスによって、私はあなたがたに遣わされた使徒である、と言っているのです。

そして、父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があるように、という挨拶を言っています。これからパウロは、神の恵みについて語ります。そして、キリストのもたらす平安について語ります。恵みと平安は、大祭司アロンが、イスラエルの民に祝福を命じられていました。「民数 6:24-26 **【主】**があなたを祝福し、あなたを守られますように。25 **【主】**が御顔をあなたに照らし、あなたを

恵まれますように。26【主】が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」

2A 御父のご計画 3-6

1B 天上にある霊的祝福 3

³私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。

午前礼拝でお話ししました。パウロは、神への賛美から手紙を始めます。その賛美が、なんところから、14 節まで続いています。ギリシア語では一文になっています。その流れを見ますと、父なる神への賛美が、3 節から 6 節まであります。父なる神は、私たちのためにご計画を立てておられることが書かれています。そして、7 節から 12 節までが、キリストがその計画を実行される、贖いについての部分です。最後、13 節と 14 節が、聖霊の働きについての賛美です。その贖いを、着実に完成するための保証となっています。計画と実行、そしてその保証です。このように、神の三位一体としてのお働きを、パウロはほめたたえているのです。

午前礼拝でお話ししましたように、その賛美は、神が祝福してくださったということに基づきます。その祝福には、三つの特徴があります。一つは、キリストにある祝福です。これからも、キリストにある、という言葉が何度も何度も出てくるので、目に留めてください。次は、霊的な祝福だということです。目に見える物質的な祝福ではなく、霊的な祝福です。物質は手にすると、さらに欲しがり、満たされることはありませんが、霊的な祝福は完全な満たしを与えます。そして次は、天上にあるということです。地上のものは過ぎ去りますが、天にあるものは過ぎ去りません。

2B 聖なる者 4

⁴すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方にあって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。

父なる神のなされたことは、私たちを選んで、そして次の 5 節にあります、「予め定めた」というものです。選びとは、神の前に聖なる者、傷のない者にするためであり、定めは、ご自分の子にすることです。

その選びを行われたのが、「世界の基が据えられる前」です。途方もないことですね！ヨブ記で、主がヨブに現れた時に、神が天地を造られた時のことを語られていますが、その始めが、「わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。」という問いかけです(38:4)。つまり、神が天と地を造られる時に、途中で選ばれたのではなく、創造の働きをされる前から、すでに選んでおられたということなのです！

これは、何を示しているのでしょうか？一つは、「自分の行いや素性、そういったものが、神のお働きには全く関係がない。」ということです。被造物によって、何の影響を受ける可能性のない時に、すでに神はあなたをお選びになっていた、ということです。ロマ書 9 章では、ヤコブとエサウが、母の胎内にいる時に既にヤコブが選ばれたことが取り上げられています。そこに、パウロは、その説明をしています。「ロマ 9:11-12 その子どもたちがまだ生まれもせず、善も悪も行わないうちに、選びによる神のご計画が、行いによるのではなく、召してくださる方によって進められるために」とあります。もう一つは、神が永遠の愛で、選ばれたということです。神は永遠に生きておられる方です。天地が創造される前から生きておられる方です。その方が、キリストにあってすでに選ばれたということは、神が永遠の愛をもって選ばれたということです。私たちが、召されたのはそれぞれ、違う時期かもしれません。ある人は、つい数か月前。またある人は、何十年も前でしよう。しかし、それぞれが、キリストにあって永遠の昔から神が選んでおられたということです。

そして、選びの目的が、「御前に聖なる、傷のない者に」するということです。次の、ピリピ人への手紙でも、パウロは、そのの信者にこう伝えています。「ピリ 2:15 それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代のただ中であって傷のない神の子どもとなり、」曲がった邪悪な世代があります。その中に私たちは生きています。けれども、神は、私たちをキリストにあって、選び別たれてくださいました。そういったものから、縁を切らせてくださいました。ただ中にあるのに、それでも影響を受けないというのが、聖なる者とされた特徴です。ちょうど水と油の関係のように、水に油を入れても全然混じることがないように、世に生きていても、混じることがないようにしてくださいました。もちろん、それは今、完全にそうになっていない自分がいることは、自分自身がよく知っています。しかし、そこに向かっているということは確かなのです。私たちが、神が私たちを聖めてくださっている働きに、自分の身を任せて行けば、御霊が、私たちをキリストの似姿に必ず、変えて行ってくださるのです。

そして、「傷のない者」とありますが、これは、主の前に献げるいけにえの動物に、傷がない状態のことを指しています。主は聖なる方ですから、この方の前にある牛や羊にも、欠陥があってはなりません。神は完全な方ですから、完全を求めておられます。私には、そんな完全な姿はない！と言われるかもしれませんが、大事なのは、「この方にあつて」なのです。キリストが傷のない、子羊のようないけにえとなられて、血を流してくださいました。この方にあつて選ばれたのですから、私たちを、神の前に立たせる時には、私たちもこの方と似た者となるように、して下さっているのです。パウロは、テサロニケ人への第一の手紙で、このように祈っています。「Iテサ 5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。」今は完全ではありませんが、後に完全な者となるのです。その完全に向けて、私たちは今、信仰によって神を追い求めています。

3B 神の子 5

⁵神は、みこころの良しとするところにしたがって、私たちがイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。

父なる神が、その主権をもって、私たちを、ご自分の子にしようと定められました。「みこころの良しとするところにしたがって」とあります。これは、養子縁組にするということで、子にするのは、その親が決めることです。孤児院があって、そこにいる子を選び、自分の子にするのですが、その選びは、まったくその親の思いにかかっています。

そして、「イエス・キリストによってご自分の子にしようと」とあります。神にとって、イエス・キリストは、ご自分の独り子です。独り子であり、神ご自身です。私たちは、神のかたちに造られた人にか過ぎず、被造物にしかすぎませんが、それでも神は、イエス・キリストとの間にある父子の関係を、私たちにまで押し広げてくださいました。血はつながっていないのに、法的には同等の権利が与えられたのです。神ではないのに、神の御子と同じような権利が与えられたのです。キリストの内にいるならば、です。キリストにあって、義と認められました。キリストにあって、栄光の姿に変えられます。キリストにあって、共に再臨の時に現れ、御国を共に統べ治めるのです。

そして、それが「愛をもって」ということです。だれかを養子縁組にする時に、愛をもってその子を自分の子とします。その愛をもって定めてくださったのです。そして、「あらかじめ」定めたということも、すごいです。神に、「おっと、間違っただけ」ということはないのです。エペソの町には偶像が溢れていましたが、それらの神々は何をしでかすか分からない、気まぐれなものでした。しかし、この方は違います。予め定めておられて、その通りを実行されて、確実に完成していただけます。

4B 恵みの栄光 6

⁶それは、神がその愛する方にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

父なる神がこれらのことを行われたのは、その栄光がほめたたえられるためだということです。この、栄光がほめたたえられることについては、キリストの働きにおいても、最後の 12 節に、「神の栄光をほめたたえるためです」とありますし、聖霊の働きにも最後に、14 節で「神の栄光をほめたたえるためです」とあります。神がお働きをするのは、ご自分に栄光が帰せられるためなのです。私たちが何か、良い人間になって、それで私たちがすばらしいのだということではなく、こんなことを成される神はすばらしい、ということのために、これらの働きがあるのです。

そこで、ここ 6 節では、「恵みの栄光」と言っています。なぜ、神が、キリストにあって私たちに恵みを与えてくださったのでしょうか？それは、神の恵みだからこそ、その栄光は私たちにではなく、

神ご自身に帰するからです。

神の恵みについて、誤った考えがあります。私たちが、難しくなく、簡単に救いを得ることができ
るためにしてくださった、ということではありません！私たちの便益のためではないのです。そうで
はなく、どうしようもなく墮落して、罪深く、取るに足らない、無益な者が、キリストによって聖なる者、
傷のない者にされるということであれば、神がいかに恵みに満ちたすごいお方かが、明かになる
からです。家が少し壊れたのをきれいな家に修復したとします。その建築家と、全壊した家をまっ
たくすばらしい家に造り変えた建築家と、どちらがすごいと思いますか？後者ですね。全くだめな
状態、修築は不可能だと思われていたところを、完全に修復したら、奇跡ですね。これを、「恵みの
栄光」というのです。(I コリ 1:27-29 参照)

3A キリストによる実行 7-12

1B 血による贖い 7

⁷ このキリストにあって、私たちはその血による贖い、背きの罪の赦しを受けています。これは神の
豊かな恵みによることです。

ここから、キリストによる神のご計画の実行の部分に入っていきます。それは、「贖い」でありま
す。贖いは、元々、商業用語です。買い戻すということです。自分の所有であったものが、売り渡さ
れてしまいました。それで、自分のものに取り戻すために、対価を払って買い戻すのです。それが、
「血」によって行われた、ということです。キリストは、ご自分の血を流すという、金銀よりもはるか
に尊い対価を支払われることによって、私たちを神のものとしてくださいました。

そして、「背きの罪の赦し」とあります。神に対して、私たちは背きました。その対価は死です。赦
すというのは、帳消しにすることでもあります。借金があったのに、それを帳消しにすることは、赦
すという意味をよく表しています。罪を思い起こさせることによって、その人に負い目を作り、その
重責感で悩ますことができます。けれども、罪を過ぎ去らせ、拭い取ることによって、その人の魂
は癒され、救いの喜びに満たされます。そうした帳消しの働きです。

これが、「神の豊かな恵みによる」ということです。豊かさを、語っています。エペソの町はとても
豊かでした。けれども、パウロは、霊的な祝福、霊的な豊かさを話していました。それは、恵みにお
いて、豊かだということです。神が、私たちが受けるに全く値しない祝福を、惜しみなく注いでくださ
るところの恵みです。使徒ヨハネは、福音書で、これを「1:16 この方の満ち満ちた豊かさの中から、
恵みの上にさらに恵みを受けた。」と表現しています。ちょうど波が浜辺に押し寄せるように、波が
引いたかと思ったら、またその上に波がやって来る、という感じですね。恵みの上に、さらに恵みを
受けるのです。初めに恵みを受けて、もうそれで終わりではなく、その上に受けて、またその上に
受けるのです。主の慈しみは尽きることがなく、日ごとに新しいのです。

2B みこころの奥義 8-10

⁸この恵みを、神はあらゆる知恵と思慮をもって私たちの上にあふれさせ、

主は、その豊かな恵みを、無駄に注がれることはなさいませんでした。そのご計画がしっかりとあり、あらゆる知恵と思慮を用いられたということです。例えば、数百億円の宝くじが当たったとしても、そこにコンサルタントを雇って、その人にそのお金を委託して、上手に管理して、いかにそれを用いていくべきか相談することができるとしたら、どうでしょうか？高額の宝くじに当選した人は、結局、その生活水準は元に戻るのだそうです。つまり、貧乏根性を出して、放蕩の限りを尽くして、それで結局、貧乏に逆戻りするのだそうです。成功している人は、その金額を受け取っても、生活水準をほとんど変えない人なのだそうです。（ここで、誤解しないでほしいのは、宝くじを推奨しているわけではありません。むしろ、宝くじは一攫千金を狙ってのことですから、みこころに反すると思います。あくまでも、喩えです。）

つまり、私たちが受け取ることのできるように、知恵と思慮をもって溢れさせてくださいました。その一つが、イスラエルに対する選びです。また律法を与えられたことです。ガラテヤ書で学びましたが、もし私たちが、一足飛びで、信仰によってアブラハムの約束を受け継ぐと言われても、その信じて生きるということが分からなかったことでしょう。律法を与えられたことによって、なぜ十字架につけられたキリストを信じる必要があるのかを、知りました。また、エペソ2章後半で学びますが、イスラエルを神は選ばれたことによって、異邦人は蚊帳の外に置かれました。けれども、蚊帳の外に置かれることによって、むしろ、神の家族の中に入ることが、いかに恵みに富んでいるのかを知ることができたのです。神は、あらゆる知恵と思慮を持って、恵みにあふれさせたのです。

⁹みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。その奥義とは、キリストにあって神があらかじめお立てになったみむねにしたがい、¹⁰時が満ちて計画が実行に移され、天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められることです。

「みこころの奥義」ということですが、奥義とは、「今までは隠されていたけれども、今、明かにされているもの」という意味です。ここを説明するのに、私はサプライズのお祝いを例えに出します。相手を祝福するために、その祝福を豊かにしたいために、いろいろな人に、この計画を言わないように注意します。その間に、いろんな知恵をしぼって、お祝いをどうするか考えます。そして、一気に披露するのです。旧約の時代の時から、キリストにあって予めお立てになっていたみ旨がありました。それを、今、新約時代の使徒たちに明らかにしてくださったのです。

それが何かと言いますと、「天にあるものも地にあるものも、一切のものが、キリストにあって、一つに集められること」ということです。神は、被造物がキリストにあって一つにされることを、みこころとしておられます。そのことを実行するために、キリストが十字架に付けられました。そこで、エ

ルサレムの神殿の幕が上から下に引き裂かれました。神が、キリストの流された血によって、信じるすべての者にご自身の聖所に入ることができるようにしてくださったのです。それが、ユダヤ人だけでなく、異邦人も入ることができるようにしてくださったのです。2章で、キリストが私たちの平和であり、隔ての壁を壊し、二つを一つにしてください、とあります。キリストにあって、ユダヤ人も異邦人も一つになることが出来ました。これが、計画の実行の始まりです。

キリストを信じる者たちが、父と子が一つであるように、一つになることを、イエス様が、ゲッセマネの園で捕らえられる直前に祈られていたことです。「ヨハ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」一つになることを、祈っています。

そもそも、アダムが罪を犯して、被造物がばらばらになりましたね。調和がとれていたのに、アダムとエバが離れて、アダムとエバの間でも責任をなすりつけて、そして土地が呪われたものとなり、被造物がうめくようになりました。それをすべて回復して、キリストにあって一つになるように、調和を取り戻すようにしてくださったのです。初めに、教会を通して一つにしてくださいます。そして次に、被造物全体を一つにしてくださいます。そして、このようにしてくださいます。「ピリ 2:10-11 それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」私たちは、主にあって一つになっていくという御霊の働きがあるのだということを知らないといけないですね。今、悪魔が躍起になって、分断や分裂を煽っているのは、この、キリストにあって一つに集められるということを阻止しようとしているからです。

3B 御国の相続 11

¹¹ またキリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました。すべてをみこころによる計画のままに行う方の目的にしたがい、あらかじめそのように定められていたのです。

一つに集められた後、その神の国を私たちに受け継ぐようにさせておられます。これが、神の子どもとしての恵みであり、神の相続人になっています。私たちはガラテヤ書で、またロマ書でもじっくり学んだことですね。そして、このようにして、神は、贖いの働き、すなわち、ご自分から離れて、ばらばらになってしまった世界をご自分のところに引き寄せるお働き、贖いの働きを完成されます。

そして、これが再び、すべてご計画にしたがったものであり、目的がはっきりとしており、予め定めておられるということです。再び、ここがエペソにおける神々と呼ばれるものとの大きな違いです。主は、間違いをしない方です。ご自分がしておられることを、よく知っておられます。だから、信じていなさい、待っていなさい。義人は信仰によって生きるのだよ、と、神は預言者ハバククに行っている

たのです(2章参照)。

4B 望みの栄光 12

¹²それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。

先ほど言いましたように、キリストの働きがこのような形で実現する時に、神の栄光がほめたたえられます。興味深いのは、「前からキリストに望みを置いていた私たち」とあることです。これは、おそらくはユダヤ人のことだと思います。ユダヤ人がイエス様に信仰を持ったけれども、ユダヤ人が元々、メシアに望みを置いていました。それが前から望みを置いていた、ということなのだと思います。その彼らが、異邦人もキリストにあって神の国を受け継ぐようにされるのを見て、その神の壮大なご計画、思いつきもしなかったご計画を見て、神の栄光をほめたたえるということではないのか、と思います。

そしてもちろん、異邦人である私たちも、キリストに望みを今、置いています。そして、御国を受け継ぐようになった時に、私たちも神の栄光をほめたたえるでしょう。

4A 聖霊による保証 13-14

¹³このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。

私たちが、御国を受け継ぐ時まで、主は私たちに聖霊をくださいました。イエス様は弟子たちに、ご自分のもうひとりの助け主を遣わすと約束してくださいました。その前に、預言者ヨエルによって、主が、すべて信じる者に御霊を注ぐと約束しておられました。御霊が、真理のことばを聞いて、救いの福音を聞いて、信じることによって与えられます。ガラテヤ 3章でみたように、みことばを聞いて、信じたから御霊が与えられました。律法の行いによって与えられたのではありません。

そして、証印という働きがあります。話は、ここも贖いのご計画の中に入っています。贖われるまで、神のものとなる時まで、確実に、私たちを神の贖われた者として守ってくださいということです。背景は、エペソの町になります。エペソの人々が、この「証印」という言葉を聞いたら、だれでも分かることです。貿易です。貿易の商品が、エペソで荷積みされて、ローマのほうで荷が降ろされます。その貨物に対して、商品の持ち主は、ろうを垂らして、そのたらししたところに、指輪についている印章を押します。今でいう、貨物に付けるラベルです。貨物には、世界中で番号がふられています。その番号が記されているのが、カートン・ナンバーと言いますが、それが当時は、証印でした。

そこで、ローマ近郊の港町、ポテオリで荷が降ろされる時に、この荷物は、この商人のものであるというのを、下僕が言って、主張するのです。そして確かに、その荷物の所有者の手に渡るので

す。これが証印の働きであり、私たちが聖霊という証印が押されたということです。つまり、御国に入る時まで、確実に私たちをご自分のものとして守っておられるということです。聖霊の賜物が私たちに与えられます。聖霊が与えられているということは、終わりの日に確実に私たちを神のものとして差し出されるということを保証してくれているのです！

¹⁴ 聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。このことは、私たちが贖われて神のものとされ、神の栄光がほめたたえられるためです。

ここの「保証」は、頭金と訳すことができます。これも商業用語ですね、頭金です。これは、だれか他の人に売られることのないように、代金の一部を払って、売り手が他の買い手に渡らないようにするための保証です。例えば、自動車を購入するとします。お金を用意するのに、あと一か月かかると思います。そうしたら、ディーラーの人に、「その間、他の人に売らないでくださいね。」とお願いします。「でも、あなた自身が、本当に買ってくれるのか、保証をいただかなければ。」ということになりますね。仮に、その一か月の間に、自分自身が何か事情が変わって、その自動車を買うのをあきらめるかもしれませんね。だから、頭金を払うのです。もし自分を買わないことにしたら、その頭金はディーラーの人のものになります。つまり、身代金みたいなもので、必ず私は、この自動車を購入する意図がありますという、本気度を、熱意を示すものです。

神が、聖霊をくださったのは、その本気度を示すものなのです！みなさんが、聖霊に満たされて、神の愛を深く知ります。喜びを味わいます。平安に満たされます。それらの聖霊の働きを見る時に、自分は必ず、贖われて神のものとされて、確実に御国を受け継ぐことができるのだと確信することができるのです！そして頭金ですから、すべての代金の一部であるのです。神の国における至福を、その一部を聖霊によって味わっているのです！自分が聖霊に満たされてその幸いにあずかっているならば、終わりの日に、その何十倍もの、とてつもない至福が待っていることを知ってください！

ロマ 8 章には、こう書いてあります。「8:23 それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだを贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」御霊は、初穂です。すべての収穫の一部を、初めの分け前です。すべての収穫が、世界の贖い、神の国の到来です。その始まりの一部が聖霊ご自身です。私たちは、ここで叫びたいですね、「マラナタ！主よ、来りませ！」。御霊に満たされた人は、主の到来を切に待ち望みます。これぞ、キリストにある、天上にある霊的祝福です。朽ちることがなく、天に蓄えられています。